人間ユリエ・キルピネンと彼の作品

豊住征子

はじめに

フィンランドの二十世紀の作曲家達は、稀にしか、その学生生活の全期間を母国で送っていない。そうした作曲家達は、その成長期の年月に自分自身を、ドイツ・フランス・オーストリア・ハンガリー・アメリカの楽派と関係を持たせ、そして彼等から必要なものを摂取し、帰国し、自分の学んだものを、生得の能力に適応していった。

フィンランドのフーゴー・ヴォルフ（Hugo Wolf 1860－1903）と称せられている歌曲作曲家ユリエ・キルピネン（Yrjö Kilpinen 1892. 2. 4－1959. 3. 2）も、ウィーンとベルリンにおいて、作曲法の基礎能力をつけていったのである。ことさら彼は、ドイツ音楽と文化に異常な程に関心を示し、七六七曲の歌曲の中、二九二曲ものドイツ語による歌を作曲している。彼は、調的語法や表現法に関する二十世紀の発展については、殆ど興味を示さなかった伝統主義者である。[1] 時に、彼はドイツロマン派のリートに従い、時には、より抑制された感情の範囲と有節型を持つスカンジナビアのロマンスに従っている。フィン語の歌曲のあるものでは、民俗音楽の最も古い形式ヨイク（Joiku）およびイトクヴィルシ（Itokuvirsi）から発展した民謡のルノ（runo）の形式が取り入れられ、拡大され作曲されている。

本稿では、一九八七年十月シベリウス博物館より取り寄せたキルピネンに関係する資料のコピーと、一九九四年二月ヘルシンキにあるフィンランド音楽センターの協力者

レーナ・サラカリ氏（Leena Salakari）から送られてきた新資料（CD四枚を含む）と、そして一九九三年一二月にシベリウス博物館の図書館員キティ・ライト氏（Kitty Wright）からの特にキルピネン以外の人名に関する資料を基に、以下のことを考察していきたい。

まず第一に、キルピネンの人間像を一層浮かび上がらせる為に、娘シーピ・サーリを始めとし、彼と接触のあった三名の人達の思い出話を取り上げることにする。これにより、彼のありのままの姿を知ることができる。次に、連作歌曲「愛の歌Ⅱ」に注目し、和音構成を考察していきたい。最後に、出版されている彼の作品を調査し整理し表にまとめてみた。

一　娘から見た父親像

キルピネンは、ピアニストのダルリング・マルガレート[②]（Darling Margaret　1886－1965）と一九一八年に結婚した。彼等の間に生まれたのが一人娘シーピ（現在サーリ夫人）である。サーリ夫人は、現在も健在でヘルシンキに居住している。幸いに筆者は一九八七年よりコンタクトを続けている。一九九三年の一二月に、彼女が書いている資料に関するいくらかの質問を投げかけたが返答して来なかった。又、一九九四年三月に、シベリウス博物館のキティ・ライト氏は、「サーリ夫人よりキルピネンについての情報を得ようと一度電話で試みたが失敗に終わった」という旨を筆者宛に知らせてくれた。

それではここで、シーピ・サーリ（Siipi Saari）が、父親キルピネンについて書いている資料を基に考察していきたい。

まずサーリ夫人の幼少時代の父親像を紹介したい。

> 私の子供の頃の父親といえば、長身・縮れ毛・堂々とした風格・鋭い目・つばの広い帽子が咄嗟に出てくる。メイラハティ[③]のような人気の少ない場所では、私には遊び友達もなく、隣に住んでいた洗礼親のマリア・タルビオ（Maria Talvio）もこの点では何の役にも立たなかった。父は、時々子ども部屋にやって来て、珍しい遊びをしてくれた。機嫌が良い時にはダンスをしたり、「赤い上着のお猿さん、手回しオルガンの上で」を一緒に歌ったりした。二人とも猿は大好きな動物だった。

次の文章から、キルピネンの仕事部屋の中の状態が、実際目の前に現れるようである。

父の仕事部屋は、私にとって家中で一番興味のあった所だった。本棚にはドイツ語の百科事典が並んでいた。父はいつも私に、同じ珍しい動物のページを開いて見せてくれた。書籍以外には、旅行先で蒐集した小物・人形・エンゼル・針鼠・亀などの貴重な品々が陳列されていた。小物はまだ引き出しの中にもあったが、綿で包まれた小箱に入った世界で一番小さい修道士と修道女を持っていた。父は、眺めて感心したいときのほか殆ど開けることはなかった。父は欠かさず喫煙することが習慣であった。口にくわえていたのは太い葉巻で、仕事部屋はその匂いで充満していた。母も父の部屋で過ごすことが好きであった。音楽の素養と才能を持った母は、父にとっては良き伴侶であり理解者であった。母は献身的に、心からの愛のすべてを、音楽と家庭の為に捧げた人である。

次に、キルピネンの日常茶飯事のことを垣間見ることにする。

妻マルガレートの仕事の一つは、キルピネンの立派な髪の毛を散髪することだった。長くのびている髪の毛を短くしただけなのに「またまた短くされた」、といつも文句を言っていたらしい。

家に居る時の彼は、長い茶色の化粧着を身につけていた。そしてそのまま広い庭へも、気にもかけず歩き回っていた。

彼は頻繁に演奏旅行に出かけたが、不在の時の家の中は、非常に静まり返っていた。そしてシーピは、不思議な程の空虚さを感じたと述べている。毎朝の母マルガレートに対する朝の説教が響いてこない。と言っても「何故管理人は、雪掻きをしたのだ」、とか「どうして明日でなくて今日薪を注文したんだ」、といった取るに足らない小言にすぎなかったらしいが。これらの説教は、彼が早起きをしなければならない時だけで、普段彼は、朝もかなり経ってから起きていたそうである。

彼は、夜に作曲することが多く、彼の音楽と歌声が、マルガレートとシーピにとっては、子もり歌になったと述べている。

彼が演奏旅行から帰宅すると、再び普段の生活が始まり、際だった独特の方法で家庭に影響を及ぼし始めるのだった。

キルピネンは、様々な国の芸術家達や、国内の著名な音楽家や文化人と、親密な人間関係を持つことのできる社交家であった。

ここでメイラハティでの招待の模様を取りあげてみるこ

とにする。

夕方になり、来客がある時には、台所からは食事の匂いが漂い、キルピネンとマルガレートは忙しく行き来した。彼は特に豪勢な夕食会の時には、必ず食卓に出されたものよりも、心の糧の重要さの方を客に強調していたと言う。ある時には夜遅くまで様々な分野の人と、特にその分野に関して意見を交わすことを好んだ。そして彼の幅広い常識、素晴らしい感、ユーモア、人間性についての憧憬、鋭い弁術により　激しい精神的な討論に勝つことがよくあったとシーピは述べている。

幼い娘シーピが成長すると、父親像も変わってきたことは明白である。

彼女の成長とともに、父を父としてだけ見ることはできなくなり、次第に距離を感じるようになっていった。それは、異常な天才を、他人から永久に隔てるものだったが、同時に自分の娘から隔てるものでもあった。

二　若き頃の二つの思い出

オィヴァ・シグルド・ソイニ（Oiva Sigurd Soini 1893－1971）は、フィンランドのオペラ歌手であり、声種はリリックバリトンであった。ヘルシンキ、ベルリン、シュトックホルム、パリ、ミラノで声楽を学び、ヘルシンキ大学で古典古代の研究に勤しんだ。彼は、一九三九年から一九五二年までフィンランドオペラのオペラ劇場のディレクターであった。

彼はベルリン留学後の一九二〇年の初め頃、キルピネンと知りあったが、それより何年も前から、スエーデンの作曲家で批評家であるモーゼス・ペルガメント（Moses Pergament 1893－?）とコンサートでいつも連れ立っているキルピネンには注目していた。

ソイニによると、当時のキルピネンの髪の毛は黒く癖毛で、がっちりとしていて、体格もよく、エネルギーに溢れていた。彼は自然に囲まれているときが一番楽しいといった屋外型の人間だったそうである。彼は歩くことが好きであった。いくら歩いても勢いと忍耐力を持っていたので平然としており、決して長すぎるということはなかったそうである。従って、彼に付き合うと、少々嫌でも長い距離を歩かされることがよくあったと述べている。

キルピネンと仲間達の間で最も共通したスポーツといえばスキーであった。彼の住むメイラハティは、まだ殆ど人の住まない所だった為、スキーや滑降には絶好の場所だった。仲間達は平坦な地面で滑ることはあまりせず、森や林

を隅無く隅から隅まで廻り、急な崖や斜面は全て滑り降りている。

ここでソイニのスキーでの愉快な体験を紹介したい。

セウラ島の海辺の崖っぷちにやって来た時のことである。そこは私にはとても危なっかしく思えたので、滑り降りる気はなかった。隣にいたキルピネンは、死を嘲笑いするかのように丘を滑り降り始めた。崖下は、彼が思っていたよりもずっと深かった為、そこで大尻餅をつき空中に飛び上がった。あまりのおかしさで、私はちぎれんばかりに笑ったのである。しばらくして、キルピネンが丘の頂上にやって来ると、甘い声で、今度は私が彼のスキーを履いて滑ってみるように勧めた。罠とは知らず、力のある限り坂を滑り降りたのである。崖っ淵ではじめて私は大変なことをしでかしたと思った。彼のスキーは殆ど二つに折れる程しなやかで柔らかかった。その結果、真に虎のジャンプのように、私は頭ごと雪の中に突っこんでしまったのである。そして、その死のジャンプの後やっとのことで這い上がってくると、丘の上からキルピネンの大声で愉快そうな笑い声が鳴り響いてきた。

スキーをやった後、いつもキルピネンの所で、牛乳入りのお茶と焼き上がったばかりのパンをご馳走になっていた。

しばらく休憩をとった後、音楽会が始まり、キルピネンは、歌手並びに伴奏者役を務め、新曲を披露してくれたと述べている。

彼の声自体は、普通でも薄く大変高い上なんとなく絞り出すような感じで、歌うことには全く向いていなかったらしい。ところが実際に歌い始めると、彼は自分の限界を越えてしまい、彼のもとの声に一種の胸声を結合させて、特に劇的なクライマックスでは、彼の歌は非常に力強いものとなり、時には震える程感情的な歌になったと言っている。キルピネンの「Fußwaschung」（洗足式）や「Marien Kirche」[4]（マリーエン教会）そして「Der Skiläufer」[5]（スキーヤー）を歌うのを聴いたことがないとすれば大きな損失であると言う。

音楽会の後も集いは談話や議論の状態で続いていき、キルピネンは疲れを知らぬ話し手で、彼の話題は決して終わることを知らなかった。ソイニは新しい考えや刺激を受け、家路に着く頃には朝も白みかけていたことがよくあったと述べている。

三　旅の随想

この随想を書いているアウネ・ケルット・アンティ⑥（Aune Kerttu Annti　1901－1983）は、フィンランドのソプラノ歌手である。特にキルピネンの歌曲の歌い手として知られている。彼女はヘルシンキとパリで声楽を学んだ。一九三一年ヘルシンキで初舞台を踏み、ウィーン、ブダペスト、バーゼル、パリ、ベルリンで演奏会を行っている。多くのレコード録音もしており、彼女の歌の解釈は知的であると書かれている。

彼女の随想からキルピネンの姿を垣間見ることができたので次に紹介したい。

アンティがキルピネンに出会ったのは、ある夏の日のことだった。その頃、彼女はまだ小学生で、母親と共にラッペンランタからサヴォリンナへ船で出発する母の友人を見送りに来ていた。キルピネンも乗船する為に港に行く所だった。偶然にも母親は彼の同行者に気付き、その同行者はキルピネンを母親に紹介したのだった。

又、何年も経過したある夏の日のことだった。彼女は夫と共にラッペンランタに来ていた時のことだった。少年達の声がした。「ほら、こっちに来るよ。来るよ。」彼女は何が来るのか、と急いで窓を開けた。するとキルピネン教授とゲルハルド・ヒュッシュ（Gerhard Hüsch　1901－1984）教授の快活なサイクリング姿が目の前を通りすぎていった。バイエルン地方の皮の半ズボンをはいた二人の姿は、この小さな町ラッペンランタでは珍しい光景で人目を引くものだった。その頃、キルピネン一家はヒュッシュ教授の家族を招いて、スキンナリナで夏を過ごしていたのであった。

筆者はここで少しヒュッシュについて触れておく。

ゲルハルド・ヒュッシュは、有名なドイツの宮廷バリトン歌手である。我が国に於いては「冬の旅」などドイツの数多くのレコードを通じて広く知られている。彼は一九二九年にケルンでヘルマン・ウンゲル（Hemann Unger）を通じてキルピネンと知り合っている。それ以来彼はキルピネンの歌曲を世に広めようとし、特にドイツで数多くの演奏会を催し大成功を納めていくのであった。

アンティがキルピネン一家と親しくなったのは、一九三五年に彼女がウィーンから帰国してからのことであった。彼女は、一九二二年にフィンランドのバリトン歌手のヘルゲ・リントベルク（Helge Lindberg　1887－1928）の演奏会でキルピネンの歌曲を聴き、非常に大きな感銘を受け

た。それからというもの、彼女自身キルピネンの歌曲を実際に歌わずにはおれなくなってしまったと述べている。

ウィーンでアンティがキルピネンの歌曲を歌うこととなり、彼女は敢えてメイラハティの彼の自宅に電話をかけ、曲の指導を願った。このことがきっかけで、彼女の全生涯に渡る歌の練習が始まったのだった。練習は戦争、病気、旅行などで中断されはしたが、メイラハティや、時には彼女の自宅で続けられたそうである。一番最初に取り組んだ曲は、フーゴ・ヤルカネン（Huugo Jalkanen）の詩を作曲したものだった。年を重ねる毎に、序々に彼が発表した全ての曲、またその上に大量の楽譜、手書きのものなども練習していった。

キルピネンは理想的なマイスターだったが、大変厳しいレッスンマイスターだったと述べている。常に練習にも議論にも非常に熱が入ったという。練習時間中、彼はいつも伴奏し、葉巻を銜えながらも彼女が歌うのと同じ位歌ったものだった。彼に熱が入ってくると、微笑みながらいつも「そう上手く合うよ」と言いながら何度も中断したものだったそうである。

他の伴奏者とは、キルピネンの場合とは違い、上手く弾いてくれるとは限らなかった。その時のレッスンの模様を紹介しておく。

私が他の伴奏者を伴って、ある歌のレッスンを受けていた時のことである。キルピネンは、いつものように何度も伴奏を止めさせた。その伴奏者は怒った顔付きで立ち上がり「譜面通りに正しく弾いています」といった。キルピネンは、しばらく葉巻をふかせながら言った。「あなたの伴奏は芸術になっていない」。

一九四四年、アンティはフィンランド作曲芸術週間の期間中に、キルピネンの歌曲の演奏会を行った。この時戦争中に作曲されたヘルマン・レーン（Hermann Löns）と、そしてエリック・ブロンベルク（Erik Blomberg）の詩による歌曲を初演している。タウノ・カリラ（Tauno Karila）は次のような批評を書いている。

アウネ・アンティがキルピネンの歌曲だけに絞って歌った昨日の演奏会は、フィンランド作曲芸術週間を非常に豊かにした芸術的なものであった。彼の歌曲は価値の高いものである。特にレーンス歌曲集には興味を覚えた。と言うのも、それが初演であったこと、又それがプログ

ラムを広範囲に渡って完璧に統一するものであったからであろう。詩は民族的で感情的な上、人間味に溢れていた。そして歌詞の資質にかかわらず、質の高い芸術作品に達していたと言えるだろう。

一九四五年、フィンランド文化基金と地方文化協会の援助で組織された「我々の文化をみんなのために」と銘打った演奏会が行われている。そこでは三名のヘルシンキ人、キルピネン、大学講師エイノ・クロン（Eino Krohn）アンティ、そして地域のコーラスやオーケストラが参加している。場所はハメーンリンナ、タンペン、オウトクンプ、ヴァルカスで開催された。最初の演奏会はハメーンリンナの市庁舎であり、音楽家の控室は普通の事務室だったという。

一九五〇年二月二八日のカレワラ祭で、キルピネンの歌曲の演奏会が催された。カンテレタールの歌が主に歌われた。オペラバス歌手キム・ボルク⑦（Kim Borg　1919―）が八曲、アンティも八曲歌った。カンテレタールの歌は、一九五三年ファッツェルから出版された。

最後に、アンティがキルピネンの亡くなった状況について描写しているので紹介しておきたい。

最後に私がキルピネンを見たのは、死の数時間前の司祭室であった。どの花瓶にも美しい花が飾られ、緩やかな日の光が、彼の美しい灰色の髪を照らしていた。窓の側にはユリエ・アラネン（Yrjö Alanen）教授がキルピネンの臨終の祈りを捧げていた。一九五九年三月七日⑧、彼に捧げた最後の歌は、Dödens Vila と Tuuti, Tuuli, Iummaistani（子もり歌）である。

四　友人としてのキルピネン

トルマネン（V. E. Tormanen）は、フィンランドの詩人である。先ず彼がキルピネンを知り合っていく経過を述べていきたい。

トルマネンの最初の詩集「山の歌」が、クスタンヌス社から出版された。出版者エイノ・ライロ（Eino Railo）は、彼の作品をヴァイサネン（A. O. Vaisanen）に進呈した。彼はカレワラ協会会長で、後に博士となり、音楽科教授となった人物である。彼はトルネマンの詩に、芸術的な価値を認め、友人キルピネンの訪問時に、本棚から詩集「山の歌」を取り出し、このような作曲に適したフィンランドの連詩を今まで見つけたことはないと言って推奨した。キルピネンは、その連詩「山の歌」に感動し、一二の詩を

作曲した。詩がスェーデン語と独語に翻訳されると、ファッツェル社より一九二七年に作品五二・五三・五四として出版された。そしてその後、ヴィヒティに住むトルマネンの所に手紙を書き、出版された旨を知らせると同時に、ラークソラという名の別荘の近くのメイラハティのキルピネンの家に招待したのだった。キルピネンとピアニストである彼の妻マルガレートは、快くトルマネンを迎えた。又現在はサーリ夫人となっている小さな娘のシーピにも会っている。そうして幸運にも、キルピネンと共にラークソラの別荘を訪れ、その女主人である小説家マイラ・タルヴィオ（Maila Talvio）と主人のユーシ・ミッコラ（Juusi Mikkola）とも知り合うこととなる。それ以後彼等の友情は一生涯続いていった。キルピネンは一度だけ、トルマネンの住むヴィヒティのイリヤラの小学校に来たことがある。それは美しい夏の日のことで、作曲家の友人トィヴォ・ハーパネン（Toivo Haapanen）と一緒だったと述べている。

トルマネンは、キルピネンが如何に誠実な友人であったか、又、あの文化的水準の高いドイツで如何に尊敬されている人物であったかを詳細に示している。

キルピネンは、彼の音楽を通じて、ドイツの方々の文化的地域で知られていたが、リューベックでも非常に有名であった。それ故、夏至祭の少し前、古いハンザ都市で催される〝北欧デー〟に招待されることとなった。リューベックを中心に北欧協会がある。この協会は、資金を出して毎夏、デンマーク、スェーデン、ノルウェー、アイスランド、フィンランドの文化に従事する人々を対象に、ドイツへ二週間招聘する制度を執行していた。キルピネンは、一九三六年に、この協会から、フィンランドからは、どのような人を招待すればよいかを尋ねられたのである。その時、彼は私を招待することを提案したのだった。幸いにキルピネンの交渉は上手くいき、私のドイツ行きが決定したのである。旅の友として、ドイツに頻繁に行っているタルヴィオが、母のように旅のガイドを務める事となった。六月のある日、私は飛行機に乗り、霧のかかる空をエストニア、ラトビア、リトアニアを越えて、ドイツの首都に向かった。そこでは、キルピネンとフィンランドでも歌手として有名なヒュッシュが迎えていた。ベルリンからは、タルヴィオも共に汽車でリューベックに向かった。北欧デーが終わると、私はキルピネンの世話になり、テューリンゲンにある現代的で居心地のよいホテル「ヴァールブルク城」に宿泊した。

又、ヴィルヘルム二世の親戚の住む美しい家に、キルピネンとその他のフィンランド人達そして私も、昼食の席に招待された。女主人は、以前プロシア皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルム（Friedrich Wilhelm）の未亡人で、皇帝の妹アガーテ（Agathe）であった。昼食の席には、彼女の美しい娘達二人も見えた。彼女たちはキルピネンの両側に座っていた。私の周りには、ある公爵とドイツの貴族達、フィンランド人ではグスタフ・コンペ（Gustaf Komppe）大使館員とその息子夫婦がいた。その後インゼルスベルク山へドライブをした。友人と共に異国で過ごしたこの二週間は、小さな我家で過ごす二年間よりも、私の魂を豊かにしたと言えるだろう。

その頃の多くのみじめな詩人達は、不運に身を任せていたのだが、キルピネンは、その後もトルマネンを悉く援助したそうである。

五　連作歌曲「愛の歌Ⅱ」（Lieder der Liebe Ⅱ）の和音構成

「愛の歌Ⅰ・Ⅱ」の連作歌曲は、風景画家を祖父に持つドイツのクリスティアン・モルゲンシュテルン[9]（Christian Morgenstern　1871. 5. 6.－1914. 3. 31）の詩にキルピネンが作曲したものである。

「愛の歌Ⅰ・Ⅱ」は、調べた結果一九二八年に作曲されていることが分かった[10]。レコードでは一九三五年にヒュッシュとキルピネンの妻マルガレートにより演奏されたものが初めの盤と言える。

キルピネンは、フィンランドのバリトン歌手ヘルゲ・リントベルク（Helge Lindberg）の示唆により、モルゲンシュテルンの詩を作曲することになったのである[11]。中部ヨーロッパで成功したリントベルクは、キルピネンのトルマネンの詩による「山の歌」の連作歌曲に感激し、演奏会でこの歌を披露した。彼はベルリンで、一九二〇年一二月にキルピネンと出会っている。二、三年後に、彼はキルピネンに、モルゲンシュテルンの詩を読むように提案したのである。そしてついにキルピネンは、一九二八年に少くとも七四曲（作品五九番六曲、作品六〇・六一番一〇曲、作品六三－七〇番）を作曲している。

次に「愛の歌Ⅱ」の和音構成を考察していきたい。

第一曲　故郷（Heimat Op. 61Nr. 1）

この曲は、ロ短調で形成されており、ＡＢの二つの部分から成り立っていると考えられる。Ａは、一小節目から九

LIEDER DER LIEBE II
SONGS OF LOVE II

Heimat
(Christian Morgenstern)

Home

English translation by Olive Burnaby

Langsam und innig ♩. = etwa 40
Lento espressivo

Yrjö Kilpinen, Op. 61 Nr. 1

Gesang

Klavier

Nach all dem Men-schen-lärm und
When all the toil of day is

経過音 経過音

自然短音階→ h: I — V〔I² VI〕 I V〔I²
(IV)

保続音

倚音

–Dust in dir, ge-lieb-tes Herz, zu ruhn, so
done, To rest, be-lov-ed one, in thee, Our

経過音 経過音 経過音

VI V I² V
(IV) V̄

mei-ne Brust an dei-ner Brust, du mei-ne Hei-mat nun!
hearts a-beat in love as one, Is per-fect home for me!

経過音 経過音 経過音

I V〔I² VI V I² V
(IV) V̄

小節目までで、ロ短調のvの和音の保続低音が特徴的である。そして短音階の中の自然的短音階が用いられている。これを用いると、導音的なものがなくなり素朴な感じを与えることができる。Bは、一〇小節目から一九小節目までロ長調、ロ短調（ロ長調の同種短調）、ロ長調へと転調している。この九小節間、ロ長調のⅣの和音とロ短調の―[7]の和音とロ長調のⅤの和音の保続低音が鳴り響いている。全体を捉えた場合、ピアノ部分の右手はオクターブで半音階で降下している。この曲に用いられている和音は、非常に単純なことに気付く。この曲の拍子は、$\frac{12}{8}$・$\frac{9}{8}$・$\frac{6}{8}$・$\frac{9}{8}$・$\frac{6}{8}$・$\frac{12}{8}$・$\frac{6}{8}$・$\frac{9}{8}$・$\frac{6}{8}$・$\frac{9}{8}$・$\frac{12}{8}$へと変化している。

第二曲　小さな歌（Kleines Lied Op. 61Nr. 2）

モルゲンシュテルン自身はこの詩を「ダニーに」という題名をつけており、ノルウェーでの訪問の思い出を詩にしている。

この曲は、ト長調で形成されており、明確な段落はないがＡＢＣの三つの部分から成り立っていると考えられる。Aは、一小節目から八小節目までで、ピアノ伴奏部分で三度、六度の協和音程が並行して動き、よりロマンティックな感じがする。左手のオクターブはト長調の音階であることに気付く。Bは、九小節目から一五小節目までで、Aの右手の伴奏に引き続き、四分音符で和音が連打され進んで行く。Cは、一六小節目から二三小節目までニ短調、ト長調へと転調している。全体を捉えた場合、右手のピアノ伴奏の単調な和音の連続が特徴的で、歌詞を優先させている手法をとっていることに気付く。この曲の拍子は、$\frac{4}{4}$・$\frac{3}{4}$・$\frac{4}{4}$・$\frac{3}{4}$・$\frac{5}{4}$・$\frac{3}{4}$・$\frac{4}{4}$・$\frac{3}{4}$・$\frac{2}{4}$・$\frac{5}{4}$・$\frac{3}{4}$へと変化している。

第三曲　胸につけたお前のバラ（Deine Rosen an der Brust Op. 61Nr. 3）

この曲は、ヘ長調で形成されており、ＡＢＣの三つの部分から成り立っていると考えられる。Aは、一小節目から六小節目までで、四小節目の二拍目と四拍目に変ホ長調の和音（借用和音）[12]が使用されている。これはよく歌曲などに普通見られるもので、ヘ長調の主調への装飾の作用に留まっているものである。Bは、七小節目から一一小節目までで、変イ長調、変イ短調、ホ長調[13]（エンハーモニック転調）、嬰ヘ長調、ヘ短調（エンハーモニック転調）へと転調している。再び一七小節目の二拍目に変ホ長調のⅠの和音（借用和音）が用いられている。全体を捉えた場合、この曲は、長調と短調の中で三連音符によって軽やかさを示

し、憧れと現実への期待の気持ちが潜在していると言える。この曲の拍子は、$\frac{12}{8}$・$\frac{9}{8}$・$\frac{12}{8}$・$\frac{9}{8}$・$\frac{12}{8}$・$\frac{9}{8}$・$\frac{6}{8}$・$\frac{12}{8}$へと変化している。

第四曲　幾千の山々を越えて（Über die Tausend Berge Op. 61Nr. 4）

この曲は、ロ長調で形成されており、ＡＢＣの三つの部分から成り立っていると考えられる。Ａは、一小節目から一一小節目までで、ロ長調のＶの和音とＩの和音が縦に重なった部分があり、その両端嬰・へと・ロ、嬰：ハと嬰：へが完全四度を成している音別、即ちテトラコードを用いているのに気付く。この手法は、日本の音楽でもよく使用されている。又、ロ長調のV_{12}とI_{+6}の和音（Ｉの和音に第五音の長二度上の音を加える）の使用も特徴的と言える。Ｂは、一二小節目から二二小節目までで、ロ短調、ロ長調、ハ長調、ロ長調、イ長調、嬰へ長調、ロ長調へと転調している。Ｃは、二三小節目から三七小節目までで、Ａと同様にテトラコード、ロ長調のV_{12}とI_{+6}の和音が用いられている。全体を捉えた場合、この曲の拍子は、$\frac{2}{2}$・$\frac{3}{2}$・$\frac{2}{2}$・$\frac{3}{2}$・$\frac{2}{2}$・$\frac{3}{2}$・$\frac{2}{2}$・$\frac{3}{1}$へと変化している。

第五曲　甘い約束（Anmutiger Vertrag Op. 61Nr. 5）

この曲は、ロ長調で形成されており、ＡＢＣＤの四つの部分から成り立っていると考えられる。Ａは、一小節目から七小節目までで、ロ長調のＩの和音とＶの和音の繰り返しに気付く。Ｂは、八小節目から一六小節目までで、嬰ハ長調、嬰ト長調に転調している。ロ長調のＶの和音、嬰ハ長調のＩの和音、嬰ト長調のＶの和音のみが用いられている。Ｃは、一七小節目から二六小節目までで、嬰ト長調、ロ長調へと転調している。又、嬰ト長調のＶの和音とロ長調のＶの和音の保続低音が特徴的である。Ｄは、二七小節目から三八小節目までで、ロ長調のＩの和音とＶの和音（V_9の場合もある）のみ用いられている。又、ロ長調のＩの和音の保続低音が特徴的である。全体を捉えた場合、この曲の拍子は、$\frac{4}{4}$・$\frac{2}{4}$・$\frac{4}{4}$・$\frac{3}{4}$・$\frac{2}{4}$・$\frac{4}{4}$・$\frac{3}{4}$・$\frac{4}{4}$・$\frac{3}{2}$・$\frac{4}{4}$・$\frac{2}{4}$・$\frac{4}{4}$・$\frac{2}{4}$・$\frac{4}{4}$・$\frac{2}{4}$・$\frac{4}{4}$へと変化している。

筆者は五曲を検討した結果、拍子の変化が多いことに気付く。これは、言葉との関係を考えた作曲手法ではないだろうかと考えている。

六　出版されているキルピネンの作品

筆者は、出版されているキルピネンの作品を調査し整理した上で、読者の便宜を考慮して、次のような表の形式でまとめることができた。

歌　　曲		
OP.	曲名〔作詞者〕　使用言語　出版社	作曲年
3.	カンテレタール〔民謡〕(2. マリアよ，眠らせておくれ，フィン語・スエーデン語　3. 恋人の墓地，フィン語・独語)　REW	1912－1918
4.	静寂〔テーゲングレン〕スエーデン語・フィン語　REW	1912－1918
7.	3つの詩〔キヨスティ〕(1. 花を眺めて，フィン語・スエーデン語　2. カッコウの呼びかけ，フィン語・独語・スエーデン語　3. 森に忍びよる乙女，フィン語・独語)　REW	1912－1918
10.	9つの詩〔オネルヴァ〕(1. 教会，フィン語・スエーデン語　2. 夕べ，フィン語・独語　3. ヴァニタス　ヴァニアトゥム，フィン語・独語　4. 悲しみ　5. 信頼　6. 思い出の影　7. 秋の雨　8. 若きアポロ　9. 春の歌　4～9フィン語・スエーデン語)　REW	1912－1918
15.	31の詩〔ヤルカネン〕フィン語・独語 (1. プロローグ　2. 愛の歌　3. ある夏の日　4. 乙女の歌　5. 朝の歌　6. 移住者　7. 別離	1918－1921
16.	8. 別れの瞬間　9. お前はどこに　10. 期待　11. 昔　12. 思い出　13. 夜曲　14. 秋の歌　15. ひとの運命	
17.	16. 夕べに　17. 夜　18. 悲しい道　19. 流浪　20. おお日々よ　21. 浅い眠り　22. クリスマスの礼拝　23. 春が去る　24. 月の光　25. 森の中の静けさ	
18.	26. 夕焼け　27. 朝　28. 夜の友　29. むなしい努力　30. 万霊節に　31. スキーヤー　B&H	
19.	12の詩〔エイノ・レイノ〕フィン語・独語・スエーデン語 (1. 樅の木と小鳥　2. 蛾　3. 恋い慕う　4. りんごの花　5. 秋の歌　6. 青白く光る月　7. 夕べに　8. 町旅行　9. 岸辺にて　10. 小さなバラード　11. 永遠の春　12. 朝に)　WH	
20.	37の詩〔コスキニエミ〕フィン語・独語 (1. 美しい哀歌　2. エンデュミオン　3. 早い春　4. 童話の中の鳥のソネット　5. 夜の哀歌	1918－1921
21.	6. 愛に寄せる悲歌　7. 月の光に　8. 花だいこん　9. 夏の夜に　10. 9月のソネット　11. 不思議なできごと	
22.	12. 広野Ⅰ　13. 広野Ⅱ　14. 広野Ⅲ　15. 広野Ⅳ　16. 広野Ⅴ	
23.	17. 岸辺からⅠ　18. 岸辺からⅡ　19. 夏の夜　20. 子もり歌　21. 古き歌　22. 荒波	
24.	23. 秋の雨　24. 秋に輝く星　25. 秋のソネット　26. 孤独　27. イカロス	
25.	28. 友情　29. お前，私の沈黙の道連れ　30. さよなら，またお目にかかりましょう　31. 孤独の哀歌　32. へりくだりたまえ	
26.	33. 恐怖の悲しみ　34. 私はお前を気にかけなかった　35. 白い町　36. 雲雀　37. 日の出)　EF	
27.	15の詩〔ヨゼフソン〕スエーデン語・独語 (1. 小さな少年　2. 子もり歌　3. 若き鳥　4. 花　5. 妖精と紅冠鳥	1922－1927
28.	6. 不変　7. 海岸で　8. 愛　9. 白鳥の歌　10. 海で	
29.	11. 嵐に　12. 我が墓　13. 日本の水彩画　14. 私　15. 水の精)　WH	
30.	13の詩〔ベルクマン〕スエーデン語・独語 (1. 鐘　2. きらめく星のような眼　3. メロディー　4. 天使　5. お前と私	1922－1927

31.	6. ゆるやかに 7. ある夏の夜 8. 銀河 9. 最後の星 10. 心	
32.	11. 耳をすませてごらん 12. 森のざわめきと嵐の音 13. フィヨルド湾の嵐) WH	
33.	15の詩〔ラゲルクヴィスト〕スエーデン語・独語(1. さすらいの人生 2. 大きな喜びはどこに 3. アーモンドの花咲く頃 4. 明るい微笑 5. お前は一番 6. 私に点された光 7. 千年も過ぎた 8. 子よ, 私が何としてでも 9. 一つの言葉	1922−1927
34.	10. 愛する世界 11. 今, 邪魔しないで 12. 激しい雨 13. おお, 冬の夜 14. 高き空にある雲 15. ひと休み WH	
39.	20の詩〔エステルリング〕スエーデン語・フィン語・独語(1. 歌 2. 心配のない翼 3. 忘な草 4. 夏の音 5. 聖霊降臨祭 6. 白鳥	
40.	7. 春のリフレイン 8. つぐみ 9. お話, 私の恋人よ 10. 泉に 11. デュリアスⅠ 12. デュリアスⅡ 13. デュリアスⅢ	
41.	14. 古い歌 15. 長い苦悩のあと 16. 広野 17. 脱穀機が鳴り止む 18. 嵐の炎 19. 永遠の朝 20. 新年の挨拶) WH	
42.	6つの詩〔ウルマン〕スエーデン語・フィン語・独語(1. ルーネ文字 2. 行かせよ 3. 風景 4. 夕べ 5. 太陽 6. 放浪) WH	1922−1927
43.	16の詩〔クナッティンギウス〕スエーデン語・フィン語・独語(1. 春のメロディー 2. 小さな少女 3. 小さな春の調べ 4. 祝福の冠 5. 輪舞	1922−1927
44.	6. 憧れの島 7. 小さな家 8. 人は財を望む 9. よくお眠り 10. 小さな老人の歌	
45.	11. バラ 12. 快い春 13. 思い出	
46.	14. 真白な白鳥 15. 死後の安息 16. 響け鐘) WH	
47.	6つの詩〔クナッティンギウス〕スエーデン語・フィン語・独語(1. 私のおとぎの国 2. 太陽の輝き 3. 心よ, 歌え, 4. 趣きのある歌 5. 野バラ 6. さあ踊ろう) EF	1922−1927
48.	27の詩〔ブロンベルク〕スエーデン語・フィン語・独語(1. うねり 2. 雪の花 3. 静かに輝く星 4. お前は誰 5. 私の故郷 6. 思いがけない幸せ	1922−1927
49.	7. かつては何もなかった 8. 言えない悩み 9. 白夜に響く鳥の歌 10. りんごの木と梨の木 11. 深遠な泉 12. 心よ静かに	
50.	13. やわらかい寝床 14. ある若い母 15. 母 16. 涙するだろう 17. メロディー 18. 詩人に	
51.	19. デスデモナの歌 20. 小さな子どもの墓碑名 21. 百合の花 22. エレクトラに 23. 桜 24. 桜草 25. 寒い嵐 26. 誘惑する友 27. 雲雀の歌) REW	
52.	山の歌〔トルネマン〕フィン語・独語・スエーデン語・英語・(1. 湿原 2. 山の中の泉 3. 歌に寄せて 4. 山から	1922−1927
53.	5. 数ある苺の花 6. 悲しみの鐘 7. 渡り鳥 8. お前は行った	
54.	9. 古い教会 10. 海辺にある教会 11. 夏の歌 12. フィヨルドの歌) EF	
59.	6つの詩〔モルゲンシュテルン〕独語(1. 洗足式 2. おお夜よ 3. 二つのバラ 4. いったいその言葉は 5. 私は生きているよ 6. 壊れた祭壇)	
60.	愛の歌Ⅰ〔モルゲンシュテルン〕独語(1. むなしい心 2. 夜 3. 我々の愛 4. 暗闇に座り 5. 宿命の愛) B&B	1928
61.	愛の歌Ⅱ〔モルゲンシュテルン〕独語・英語(1. 故郷 2. 小さな歌 3. 胸につけたお前のバラ 4. 幾千の山々を越えて 5. 甘い約束) B&B	1928

62.	死を歌う歌〔モルゲンシュテルン〕独語・英語（1. 小鳥の悲しみ　2. 荒れ果てた墓地で　3. 死と孤独な酒飲み　4. 冬の夜　5. 種を蒔く人　6. 失われることのない保証）　B&B	1928
75.	夏のことほぎ〔ゼルゲル〕独語（1. 森に横たう静かな湖　2. もの言わぬ白き青き花々　3. ハイリゲンダム　4. わが心，荒野のバラよ　5. 夏のことほぎ　6. 花のもとに）　B&B	1932－1933
77.	辻音楽士の歌〔ゼルゲル〕独語（1. 永遠の星　2. 雪に埋もれ静まり返った野原　3. ダンスの音楽を奏する　4. 踊りの歌　5. 辻音楽士の憧れ　6. 夜明け前に　7. もしワインがなかったら　8. ドイツ中を回って歌う）　B&B	1932－1933
79.	7つの詩〔ツヴェール〕独語（1. 長い苦痛　2. 故郷なき人　3. 早春　4. ヴェネツィアの間奏曲　5. レナータの歌　6. 夜の歩哨　7. ダンツィヒのマリーエン教会）　B&B	1932－1933
80.	墓石の歌〔ツヴェール〕独語（1. 墓石　2. 告白　3. いやに愛想のよい幽霊　4. 呪いを破るとき）　B&B	1932－1933
95.	小さな町の歌〔フーベル〕独語（1. 夜　2. 光　3. 窓辺で　4. 私の小部屋　5. 春　6. 結束，7. 野の花，8. 小さな町の春　9. 夜の嵐　10. 不安　11. 雨Ⅰ，12. 雨Ⅱ　13. 終わり　14. フィナーレ　15. 教会の塔）　B&B	1942－1946
97.	7つの詩〔ヘッセ〕独語（1. 愛の歌　2. どこに私の故郷が　3. 黒い瞳　4. お前に尋ねた　5. ただ一人　6. 幸運　7. 夢）　B&B	1932－1933
98.	秋の歌〔ヘッセ〕独語（1. 若者の逃避　2. 秋　3. 漁師の祈り　4. 二つの谷間から　5. 向こう側で　6. 祭りのあと　7. 子どもの頃　8. つかの間のこと）　B&B	1942－1946
99.	高い山脈の冬の歌〔ヘッセ〕独語（1. 登山　2. 至福の夜　3. 山の守護神　4. そりすべり）　B&B	1954
100.	カンテレタールの詩〔民謡〕フィン語・独語（1. 羊飼いの歌　2. どこに私の恋人はいるの　3. 美しいマリア　4. おいでよ　5. それなら歌うわ　6. 少年と少女　7. そのことを聞いている　8. もし私が権力と財産を持つならば　9. いつも歌う私　10. おお，なんと多くの乙女達が　11. 待ち侘びる　12. いいえ，私はできません　13. もし私が歌えば　14. 二羽のカッコウが鳴く　15. 踊り　16. 若い仲間　17. 太陽よ，明るく輝け　18. 可哀想な子ども　19. もし私に男の人がいたら　20. 子守歌　21. 何が私を悲しませるのか　22. うまくいくだろう　23. もし私が白い靴を持っていたら　24. 喜びの心　25. 氷が割れる　26. 淋しく歌う　27. みなし子　28. 私には自慢の青年が　29. 歌いたい　30. 主よ，再び与え給え　31. 今はすべて高くなったよ　32. トーマス，歓迎するよ　33. それでは，と母が私に言いました　34. 故郷で覚えた歌　35. 朝早くかわいいカッコウが歌った　36. おや，もし歌えば何をするの　37. 私は行きます　38. ああ，お前の美しい故郷　39. 母にどのように報いようか　40. 美しい少女よ，歌っておくれ　41. むこうの教会の鐘の音　42. 孤独　43. 恋人が来てくれれば　44. 来ておくれ，私の恋しい若者よ　45. 数えられる多くの少女達　46. ああ私は馬鹿だった　47. 幸福な眠り　48. 小鳥のように歌う私　49. 二羽の鳥と同じ私達二人　50. カッコウのように歌えたら　51. 眠れ，ただひたすらに　52. トウヒの森で鳴くカッコウ　53. 涸らびる木の葉と草，54，おお何と下僕は辛いもの　55. 美しい戦いでの死　56. 全能の神高きところに　57. 柩に眠る恋人　58. 暗い部屋　59. 罵る言葉	1954

	60. 永遠の悲しみ 61. ひとりでに覚えた歌 62. 主婦への感謝 63. 私も一休み 64. ただこの道を行かねばならない) EF B&H	

作品番号のない歌曲

	曲名〔作詞者〕 使用言語 出版社	作曲年
	七つの詩〔ギヴィック〕フィン語(1. 美しい愛 2. 夜想曲 3. 贈り物 4. メムノンの歌 5. ある幸せ 6. 春 7. それは確かでない)	1918−1921
	二つの詩〔キヴィ〕フィン語・スエーデン語(1. 芸術 2. 幸せ) EF	1918−1921
	14の詩〔レーン〕独語, フィン語, 英語(1. ほろ苦い歌 2. 長続きしない男の真心 3. カッコウ 4. 輝く満月 5. 追い求める愛 6. 幽霊 7. 愛の妙薬 8. 荒野に歌声が響く 9. 黄金の歌 10. 思い出 11. 羊飼いの歌 12. バラの茂み 13. 敬慕 14. 美しい場所) EF	1942−1946
	子もり歌〔ポフヤンパロ〕フィン語・スエーデン語 EF	1918−1921
	月〔?〕フィン語 EF	1918−1921
	旅〔ポフヤンパロ〕フィン語・スエーデン語 EF	1918−1921
	思い出〔コヨ〕フィン語・独語 EF	1918−1921
	讃美歌 フィン語 EF	1918−1921
	ヴォカリーズ AL	1918−1921
	たわむれ〔キヨスティ〕フィン語 Arui A. Karisto Oy	1918−1921

作品番号のないユニゾン

	曲名〔作詞者〕 使用言語 出版社	
	1. 輝く太陽〔ノポネン〕フィン語	
	2. 暮らしの歌〔ポホヤンペー〕フィン語・スエーデン語	
	3. フィンランドの釣りざお〔グリペンベルク〕スエーデン語	
	4. 笑い〔コスケニエミ〕フィン語 EF	
	5. 回想 フィン語	
	6. 母国の顔〔コスケニエミ〕フィン語	
	7. 母国の歌〔ロース〕フィン語	
	8. 東方の混乱の歌 フィン語	
	9. イエルサレム〔コスケニエミ〕フィン語	
	10. 快よい歌 フィン語	
	11. 軍旗の歌〔コスケニエミ〕フィン語	
	12. 水夫〔レヘトネン〕フィン語	
	13. 狩人の歌〔キヴィ〕フィン語	
	14. 祈りの歌〔アンティフォニ〕フィン語	
	15. 困惑の歌〔キヴィマー〕フィン語	
	16. 姉の仲間〔コスケニエミ〕フィン語	
	17. 看護婦の歌〔?〕英語・仏語・独語・フィン語	
	18. フィンランドの人々〔キャネン〕フィン語	
	20. フィンランドの国〔キヴィ〕フィン語	

	21. フィンランドの紋章〔クピアイネン〕フィン語 22. 宣誓〔ユレンコ〕フィン語 23. 子どもの幸せ〔ソルムネン〕フィン語　EF	

作品番号のない合唱曲

曲名　使用言語　出版社
1．野原の結婚式〔ヴォレラ〕フィン語 2．すべてが眠る〔ヴォレラ〕フィン語 3．歌〔トルマネン〕フィン語 4．鳥〔ヴォレラ〕フィン語 5．青い霧〔ヴォルラ〕フィン語 6．戦いの歌〔ヴォイセネン〕フィン語 7．最後の言葉〔コスケニエミ〕フィン語　EF

作品番号のない行進曲

	11曲の行進曲（軍隊・葬送・フィンランド・フィンランド少女偵察隊行進曲など）　EF	1930－1937

ピアノ独奏曲

OP.	曲名　出版社	作曲年
82.	組曲　パストラル	1930－1937
84.	組曲　死の踊り	1930－1937
85.	ソナタ　Ⅲ	1930－1937
89.	ソナタ　Ⅳ　B&H	1930－1937

チェロ曲

OP.	曲名　出版社	作曲年
90.	チェロソナタ	1930－1937
91.	チェロ組曲　B&H	1930－1937

REW（Oy R. E. Westerland Helsinki）
B&H（Breitkopf & Härtel Wiesbaden）
WH（Edition Wilhelm Hansen Kopenhagen）
E F（Edition Fajer Helsinki）
B&B（Bote & Bock Berlin）

おわりに

以上、キルピネンの人間と作品について研究してきたが、キルピネンについて更に深く追求し、詳細に紹介していくことが今後の課題として残っている。その為にキルピネンの娘シーピ・サーリ氏と常にコンタクトをとることを心がけるつもりでいる。彼の自筆の楽譜は現在どこにあるのか、又作品の作曲年について年月だけでなくより詳しい日がその自筆の楽譜に記されていないのか少しずつでもあきらかにできればと願っている。

註

① ジョン・ホートン著「北欧の音楽」（一九七一年七月一〇日東海大学出版会）一九二頁二行目―七行目

② Otavan eso Musiik : Tietosanakirja
フィンランドのピアニスト。ヘルシンキ、ベルリン、ウィーン、ケルンでピアノを学んだ。一九二七年デビューコンサート以後ソリスト、室内音楽奏、そして夫キルピネンの歌曲の伴奏者として活躍した。

③ キルピネンの住んでいる地名

④ 作品七九の七番　ツヴェールの詩による歌曲

⑤ 作品一八の三一番　ヤルカネンの詩による歌

⑥ Otsvsn iso Musiik : Tietosanakirja

⑦ 一九四七年にキルピネンがモルゲンシュテルンの詩による「死を歌う歌」を送った。

⑧ キルピネンの亡くなった日は三月二日である。文章から考えると亡くなった日が三月七日のように理解するが七日に送葬の儀式があったのかもしれない。

⑨ Mortin Behelm-Schwarjbach ; Christian Morgenstern S. 1127-9 ROWOHLT

⑩ キティ・ライト氏の書簡の中

⑪ Finnish Music Quarterly 一二頁八〇行目―八九行目。一九九二年三月発行。

⑫ 一時的転調、他調和声の借用ともいわれる。浅香　淳「新訂音楽辞典アーテ」一九九二年六月一〇日　音楽之友社

⑬ 和音の全体の一部に異名同音的な転換を行っている。

（本学助教授　声楽）